

## 「入江のほとり」試論

瓜 生 清

国語科(昭和六十二年九月一〇日 受理)

### はじめに

大正五年、白鳥文学は、圧倒的な賛辞を集めた「牛部屋の臭ひ」(中央公論)大5・5)「死者生者」(同上 大5・9)などの堅固な構成と確固たる人間造型を達成した指標的な秀作によって一頂点を極めることになる。「入江のほとり」(「太陽」大4・4)は、この客観小説が成熟を迎える前夜の大正四年に発表されているのである。

白鳥には出身郷土をローカル色豊かに描いた佳作が数多いが、とりわけ「入江のほとり」は出色の出来映えを示した代表作として著名である。発表時の評価を瞥見すると、一部に「ダル」な通俗的感情の存在を難じ、史的にも否定的に見ている見解<sup>註1</sup>があるが、大方は熟知している家郷をあざやかに描いた描出力を賞嘆する論調であったと集約できる。例えば、上司小剣<sup>註2</sup>の時評は、寸分も無駄のない表現・会話の妙味など、美点を残らず賞揚し「名優の技芸を思はせる作」であると絶賛して、以後の評価の方向を領導する。上司の評言は、その後吉田精一氏の見解で支持され、大正初期の白鳥文学の円熟を周知させるに足る傑作という評価<sup>註3</sup>は定まってきた。

一体、大正四年は、白鳥文学の成熟という問題に關していかなる位相を示す時期であったのか。「入江のほとり」の検討に入る前に、同年(現代代表作叢書第五編)として刊行された『まぼろし』(植竹書院大4・1・28)の「自序」に述べられている作家姿勢について注目しておきたい。『まぼろし』は、文壇登場以来十年間の諸作の中から「二家族」(「早稲田文学」明41・9・12)「微光」(「中央公論」明43・10)「泥人形」(「早稲田文学」明44・7)など、いずれも評家の注目するところとなった佳作を所収し、(代表作叢書)に名を列ねている谷崎潤一郎の『麒麟』(第三編 大3・12・5)田山花袋の『小春傘』(第四編 大3・12・14)と比べても遜色のない充実した作品集である。白鳥はその「自序」に、ちょうど十年を闊した作家道程を検証しながら、一つの節目の時期に際会した感慨を記している。

私は書肆の需めに応じて、この文集を出版するに当って、過去十年間の重なる作物を讀返しながら、自分の青年期の精根を消耗した紀念物に対する懐かしさと悲しさを感じた。たどくしい筆の力でよくこれだけに書けたと自分の努力を思ふと共に、ありたけの脳漿を絞つてもこんな貧弱な物しか書けなかつたのかとも思つた。兎

に角私はこの文集を以て過去の汚れた記念碑として、再び新しい道に進んで、新しい苦しみを経験するより外に生存の法もないのであらう。

『まぼろし』序の後段の引用である。序文の執筆時期は、その末尾に「小田原早川口にて」と記されているので、同所に滞在中に書かれたエッセイ「早川口より」（『読売新聞』大3・12・27）の発表時期から推して、大正三年十二月の二十日前後の頃であらう。

引用文中に見える「過去十年間」（前段にも「丁度十年の月日」「十年間」などの同じ表現がくりかえされる）という創作歴は、既成文壇の根幹をゆさぶった自然主義文学の盛衰史に重なり、その一翼をになう有力作家であった白鳥にとって、決して短い歳月とは言いがたい。その間の「努力」の軌跡をふりかえりながら、作品の見劣りを強く慨嘆する「自序」の文面は、一応常套的な謙辞であるとも考えられる。

しかし、序文を脱稿した前月の十一月、それは生硬な試作「寂寞」（『新小説』明37・11）で小説壇に登場してからちょうど十年後に相当するが、「寂寞」の執筆動機、掲載までの経緯を回想した小説「十年前」（『読売新聞』大3・11・3）が発表されているのである。それでは、十年の歳月を回顧する「自序」の内容は、決して唐突な感慨ではあるまい。「十年間」の創作の道程を客体化し、その史的定位を自覚した文面であると考えるべきである。

『まぼろし』所収作品は、いずれも世評高く、好評噴々であった。だが、この間の作家修練で鍛えられた批評眼は、「青年期」の「記念物」を「貧弱な物」と断じ、「十年間」を壮年の作家へ脱皮を促してやまな成熟の時間であると認識させたのだ。その結果、あらたに散文小説の可能性を「新しい道」に模索するため、過去の道標的諸作へ清算的な訣

別の意志を固めることになったのである。このような覚悟を記す『まぼろし』序を書き終った白鳥は、翌大正四年一月、「入江のほとり」の世界へ向かう帰郷者となったのである。

# 一

ところで、「入江のほとり」については、後年の回想「文壇的自叙伝」（『中央公論』昭13・2）に広く知られている自註がある。

我々の処世上の知識も、人間の心理の動き方をも、いつとなしに両親兄弟夫婦近親から学んでゐるにしても、自分の身に縁の深い者を客観的に有るがまゝに描叙するのが、甚だ困難に思はれるのは私ばかりではないらしい。『泥人形』だの『入江のほとり』だの、身辺の事相を無造作に書き流したのは、私の作品中でも異例とも云つていゝもので、文壇の評判はよかつたのだが、私はその作風を続ける気にはなれなかつた。

「文壇的自叙伝」第四章の一節である。先ず、第四章の回想全体の脈絡を押えておく。白鳥は、自らを田山花袋が熱心に唱導した事実尊重の小説作法に賛同した自然主義陣営の一員であつたと位置づけるが、その実自分の創作は奉じたはずの理論とは異なり「主観に支配された勝手な産物」であつたと「自作自評」を展開しているのである。自然派の主流花袋と白鳥の個性の違いを明白にする回想であるわけだが、その他にも、花袋流の文学観の忠実な実践者ではなかつた白鳥が、作家の想像力の発動について不問に付し、安易に主人公即作者という図式を作品に適用している自然派作家評価の通弊を批判している文面も見い出せる。「主観的傾向」の強い白鳥本来の作風からすれば、前記引用文に世評がよかつたにもかかわらず、「入江のほとり」の「異例」な作風を続ける

意欲を感じなかったというセンテンスが見えるのも至極当然であろう。そうすると、上記の文脈の中に置かれた「入江のひとり」は、「両親兄弟」など「自分の身に縁の深い者を客観的に有るがまゝに描叙」した全く「異例」な小説であることが際立って印象づけられることになってくる。

この自註は、「入江のひとり」が血族を客観視した好個の見本であることを強調することになっているわけだが、はたして文字どおりの忠実な実録と見て誤りないのか。トリビアルな事例をあげ疑念を提起しておく。第四章に、寺の住職が不在のため老母が「来月の祖母さんの十三回忌」の法要が出来るかどうかあやぶむ場面がある。これは前記の自註と矛盾する。祖母正宗得の没年（明29）から数えると、十三回忌に該当するのは明治四十二年でなければならない。しかし、後述するように「入江のひとり」の作中時間は、大正四年に相当するのである。勿論、鐘愛した祖母の没年について白鳥が記憶違いを冒すとは考えがたい。これは些末な例で、虚構化の意図もはっきりしないが、「入江のひとり」が文学作品として世に問われている以上、主題形成のための意図的改変は多々存在すると見るのが妥当なのだ。「有るがまゝに描叙」と言う自註の趣旨は、事実関係の大綱に準拠した創作であるという程度の規定に読みかえるべきである。「身辺の事相」をいかに意味ある構造として小説世界に再組成しているか。その方法、意図については、読解を通して抽出しなければならない。

ともあれ、小説と実生活の相関関係は自明なので、この際今しばらく「入江のひとり」の私小説性にこだわっておきたい。なぜならば、小説に描かれている事柄が、一体白鳥伝のいつ頃にあたるのかという基本的問題が依然曖昧なままなのである。例えば、松本鶴雄<sup>註4</sup>氏は、作中の「釣

ランプ」（一）から「電燈」（同上）の導入にきりかわろうとしている事柄から作中時間を「恐らく大正の初め頃の時代であって、したがって発表時の大正四年から見れば現時点の、白鳥の故郷の風物であろう。」と幾分幅をもたせて推測しているのである。

以下、白鳥の年譜上の記述と作品を対照する作業は、「入江のひとり」が大正三年十二月、過去と訣別する意志を表明した『まぼろし』序を脱稿し、散文のあらたな可能性に挑戦する抱負をいだいて大正四年一月西下した白鳥の帰郷物語であることを確定し、あわせてその帰郷によって白鳥はいかなるモチーフの現実的契機に出会うことになったかを探るためであって、小説の私小説性をことごとく証明するためではない。

白鳥に関する諸種の年譜の中では、福武書店版『正宗白鳥全集』第三十巻に付載されている中島河太郎氏作製のものが現在最新かつ最も詳密である。同年譜<sup>註5</sup>は大正三年十二月から翌四年一月の白鳥について「甲府、木曾、犬山、泉州大浜、大阪を経て帰省、一月末まで滞在」と記している。この旅程は、木曾旅行記である「木曾より」（「読売新聞」大4・1・9）、同地を経て犬山に一泊した記述の見える「宿屋の二階より」（同上 大4・1・14）、及び末尾に「中国の小漁村にて」と付記し、帰郷後の閑散とした日常生活、郷里の冬の景観を描いた「一日一信」（同上 大4・1・27）などの白鳥のエッセイに対応している。その他、帰省から上京までの経過を報道した伝聞資料を補足してあげると、大正四年一月十二日の「読売新聞」の「よみうり抄」<sup>註6</sup>の欄には、「正宗白鳥氏 甲府、木曾より尾州犬山を経て泉州大浜に至り目下大阪に滞在中なり」と見え、同年二月二日の「よみうり抄」は、帰京日について「正宗白鳥氏は一両日前帰京した」と伝える。

上記のエッセイと「よみうり抄」の記事を総合すると、その旅程は、白鳥が擬せられている作中の嫡男栄一のそれに合致しているのである。第一章で栄一は「二三日大阪で遊んで、十日ごろに帰省するつもりだ。」と予報する。ところが、「十日には（中略）栄一は帰つて来なかつた。『もう四五日遊んで帰る。』と、大阪の市街を写した絵端書を寄越した」（四）。第六章に入り「栄一が帰つて来たのは、予報の日取りよりも遅れ／＼で、最早誰れも忘れたやうに噂にさへ上さなくなつた頃であつた。」その後の在宅日数は明らかではないが、第十章で出立上京する。なお、月は良吉の離郷が「高等学校」（二）の「冬の休暇」（一）の終りを意味するから一月と見てよい。栄一の帰郷から上京するまでの経過は、前記資料に見える記述とはほぼ一致しているので、「入江のほとり」が大正四年一月中旬から月末までの帰郷体験をふまえた創作であることは動かない。

次に、確定された作中の年時は、どのような執筆契機に想到させるのか。それは、作中勝代の仮名で登場する次妹乙未が英語修業のため上京することになったことである。「入江のほとり」の勝代の後日譚である小説「春が来たのに」（「文章世界」大4・5）によると、白鳥は帰省時、乙未の上京修学の志望を知る。乙未は受験のため三月下旬上京、津田英学塾に入学することになる。白鳥の生家は、長男白鳥の上京を皮きりにして、小説「Dの事」（原題「故郷」、「中央公論」大6・7）の表現を借りれば「下の奴が惣領の感化を何時の間にか受けてるんだね。（中略）皆んながおれのして来たことに似寄つたことをやりたがつてるらしい」という具合に出郷者を輩出することになった。中央文壇ではなばなく活躍していた長兄の存在が、田舎の弟妹達に強い影響を及ぼすのはごく自然であろう。過去の熱烈な出郷願望時代を回顧した「二家

族」（明41）の発表から七年後にあたる大正四年には、それは既に白鳥一人の実践ではなく、三男得三郎、五男五男に加えて、あらたに乙未までが「感化」されるにいたっているのである。

「入江のほとり」は、野卑な家郷の現実を軽侮する勝代が、東京熱を際限なくつららせる様をコミカルに揶揄している。だが、妹の野放図な上京願望がいかに田舎の女学生レベルの空想の域を出ない態のものである、その心情の熱烈さは、白鳥にかつての情熱・空想の純粹持続の時代を喚起させることになったことが注意されるのである。それは「入江のほとり」と同月に発表された「一念」（「早稲田文学」大4・4）「最初の女」（「中央公論」同上）の二作の存在が証明している。白鳥は明治二十九年に上京、東京専門学校に入学する。その年の夏期休暇に帰省中大患にかかり、二ヶ月生死の境をさまよう病臥を強いられる。小説「一念」は、小康を得たものの、未だ全快しない病状を冒して「東京の空は希望の光に耀いてる」（「一念」）るかのように思い、再度上京した経緯の小説化である。文字通り白鳥の「一念」の時代を追想する作品である。後者は、主人公が「二家族」と同じ「猛男」という名前を与えられ、邪気ない面ざしをした素封家の嫡男として登場する短篇である。そして、不潔で自堕落な村のあり様を一点に凝縮した「八軒屋」という、これまた「二家族」に出てくる同じ舞台において、村民への違和感に苦しむ潔癖な性情を追究しようとしている。「最初の女」は、「二家族」の主人公に接続する時間を描いたもので、その主題の一変奏と見做せるのである。「一念」「最初の女」の主題を一人の主人公に統合すれば、「二家族」において、自然に寄生している下層漁農民の生活へ不快感を深め、他方で無為、守旧に埋没している地主階級の退嬰的な処世態度にあきたらず反撥する穂谷猛夫が、旧家の末裔の自恃を実現すべく出

郷願望をつのらせる内容に重なるのである。

乙未の上京に触れた前記「春が来たのに」の中に「妹の手紙の中の幼稚な文句を思ひ出して彼れは嫉ましい感じがした。……彼自身二十年前に初めて上京した時のやうな気持で今一度都会の花の春を見たくなつた。」という一節が見えるが、これは、かつて精神の昂揚をもたらした上京・修学時代が過去の記憶に遠ざけられている喪失感を苦く反芻する白鳥の率直な心情表現であろう。その思いが、失われた精神の牧歌の時代に遡行する「一念」「最初の女」等の回想小説を書かせたのである。

以上のことから、乙未の上京修学問題は、白鳥に「二家族」の主題の再来と言つてよい情熱の純粹持続の時代を喚起させ、同時に「入江のほとり」の出郷者を輩出させる家郷のメカニズムを追究させることにもなつたのである。

## 二

しかし、家郷を忌避する出郷者のモチーフによって、作中の栄一・勝代・良吉（モデルは第七章に養子縁組の話があるので、のち丸山姓となつた五男の五男であろう）の形象は説明できるが、それは「入江のほとり」に登場する人物の一斑にふれたことにしかならない。上記の人物と全く逆の境遇にある故郷残留者、特に辰男（モデルは四男律四）の比重の重さは歴然としているのである。叙述の量的な多寡、内面の世界に深く分け入る密度の濃い追究のいずれの点から見ても、辰男は主人公の資格を有する。

残留者である律四への濃密なアプローチが生じた理由は、乙未の上京を機に出郷者のモチーフが再生し、その結果、嫡男の代行的役割りをになつた次男の敦夫（作中では才次）を別にすれば、唯一人本意なく郷里

に幽閉されたやうな不遇な律四の存在に意識を焦点化する心理の動きがあったためであろうとも考えられる。だが、かりにこのような心理的機微を想定しても、それがストレートに辰男を主人公格の人間へ昇格させることになつたとは考えがたい。白鳥が律四を進んで注視しなければならなくなつた別の要因について考えねばなるまい。

他の家人は、異様な孤絶に陥っている辰男について「見馴れた目には彼れの行為もさして不思議には映らなくなつ」（二）ている。それに對して「栄一は自分を憚つてゐる辰男に向つて強いて話を仕掛ける気はなかつたが、でも、折々辰男に對しては神経を凝らしてゐた。」（七）「栄一は柔しく訊いて弟の心の底を索らうとした」（九）などと、隨所に持続的な探索の視線を向けている表現が見いだせる。この栄一のことだわり方は、「流出者と残留者<sup>（註）</sup>」という境遇上の対照から生じたものとは到底考えがたい。

第七章で才次は、自立の要請にも耳を傾けようとしないう辰男を「目障り」（七）な厄介者扱いをしてはばからない。それに対して、家からの脱出者である栄一は、自由人らしい鷹揚さで家人の批判の目から辰男の英語独学の「弁護」（七）をかつて出るわけだが、それは残留者間の家常茶飯で避けがたい気まずさ、きしみに無頓着な擁護であると才次にきめつけられる。栄一は、傍觀者の認識不足を照隠しの笑いの中に隠しながら、次のやうな興味深い人物評を語るのである。「『おれの子供の時の気持に似てやしないかと思ふ。おれも家にぢつとしてゐたらあゝなつてたかも知れないよ。』／栄一は微笑しながら云つて、弟の話を外らした。」この内面上の共通性、及び家郷との関係において流出者と残留者の運命を逆転させれば、辰男の孤絶は栄一にとって無縁ではあり得ないという認定は、たとえ、それが栄一の「微笑」の表情によつて切

実なものとして提起されていない表現であることを考慮しても、律四の存在は白鳥にとって何であつたかを考える場合、看過しがたいのである。

清 生 瓜  
このような律四に向けられた尋常ではないこだわり方は、その先蹤作として「死後」(「中央公論」明44・5)の発表にまで遡ることが出来る。その四年後に「入江のほとり」が続き、その後たて続けに「旧家の子」(「文章世界」大5・3)前記「Dの事」(大6・7)「変人」(「中外」大6・11)など、律四を正面から見据えた作品が俄然数多く発表されているのである。上記の作品系譜は、一応律四像の追究が多面的になり深みを増してゆく連続線上に位置しているようである。しかし、仔細に見れば、先行作「死後」は、家族関係からの疎隔、遺産の分配問題など、父の△死後▽に漠とした不安をいだく主人公を淡々とスケッチし、未だその内面に肉薄する質の作品とは言いがたいのである。

「入江のほとり」の内容と関連させれば、「死後」は、七八年前隣国作州で代用教員をしていた時代の律四が、孤独ながら家郷の呪縛を離れて相対的な安定を確保し得ていた姿を描いたものであり、そのため異様な孤絶に陥る前段階であつたと言える。ところが、四年後の「入江のほとり」は、辰男の内面に自在に立ちいり、深く内向する孤絶の世界を鋭く抉りだしており、両作品の間には一線を画すことが出来る作風の断層が認められる。このような差異は一体なぜ生じたのであろうか。それを解釈するヒントになる前記第七章の栄一の言葉は、「Dの事」の中に類似表現を見いだすことが出来る。

余程前に病院で鼻の療治をした時に、親爺は付き添ひに行つてゐたさうだが、後でその時のDの様子をおれに話して、Dはお前によく似てるとつくづく感じたやうに云つてゐた。何がよく似てゐるんだ

か、親爺も云はなければおれも訊かなかつたが、大抵は察しがつく。(中略)自分の望みを押し潰された不平が昂じてあゝなつたのかも知れないよ。……おれがずつと田舎にゐたらDのやうにして二十代を送つたかも知れない。

引用前半部の父の言は、失意と落魄の生涯を閉じた律四に手向ける鎮魂の作「リー兄さん」(「群像」昭36・10)にも酷似した表現が見える。その他、母・次弟の死を描いた一連のレクイエムである「今年の初夏」(「八雲」昭18・6)「今年の秋」(「中央公論」昭34・1)などにもくりかえされ、白鳥が父の言について「子を見る親に如かず」(「今年の秋」)「子を見る事親に如かず」(「リー兄さん」)と述べて執拗にこだわり続けていることも周知である。

律四が無断で突如上京を決定したため、家人が憂慮する「Dの事」の内容は、「入江のほとり」の辰男の後日譚である。その作中時間は、大正六年四月二十四日、及び同六月八日付父浦二宛書簡(註)によって大正六年の初夏頃と確定できる。前記「Dの事」の回想の中に出てくる父の言が、いつ頃白鳥に告げられたのか、前後のコンテキストをたどつても「余程前」と「後で」の年時を推断することは出来ない。だが、その文脈に見える「鼻の療治」という内容は、「入江のほとり」第二章の老父と才次の会話の条に見い出せるのである。即ち、辰男が頑なに心を閉している原因を「音楽家」(二)の志望が許されなかったためではないかと断定する父に対して、才次は「そればかりぢやない。鼻がまだ直り切らんのでせう。一寸見ると拗ねて居るやうぢやが、五年も六年も拗ね通されるものぢやない。身体に故障があるからでさあ。」と述べ、以前の鼻の療治が完治していないためであると考えている。このように「入江のほとり」と「Dの事」の間に「余程前」の疾患をめぐる叙述に一致が

認められること、前記の律四を描いた一連の作品において、「死後」と「入江のひとり」の発表期間に四年間の経過があるのに対して、「入江のひとり」以降にわかに作品数が量的に目立っていること、さらに形象上において、その内面に肉薄するアプローチが「入江のひとり」から始まっていること等を勘案すると、白鳥が律四との類似性を指摘されたのは、大正四年の帰省時であったのではないかと推定されるのである。

「Dの事」は父が指摘した両者の類似性について「大抵は察しがつく。」と明言しながら、なぜかその真意については定かではない。両者の類似性に言及する前記の一連の小説を調べても、いずれにも明快な叙述はされず曖昧なまなものである。この点について高橋英夫氏は「他人や外部にむけての露骨な、時には奇矯な不感無覚の態度がみごとに二人に相通じていたということではないか。『リー兄さん』は奇人としての生活態度でそれを示し、白鳥は文学として、つまりは自然主義の上に生いたった文学的思想として示したというわけであろう。」と犀利な分析を提出している。卓抜な洞見であり、これに修正を加える見解を持ちあわせないが、しかし「入江のひとり」を仮りに辰男の「不感無覚の態度」の形成史であると考えてゆくと、氏の指摘は、それにかかわる要因について「青年期の何か微妙な蹉跌<sup>註11</sup>」という説明しか与えていないことに不満が残るのである。

「入江のひとり」第七章の「おれの子供の時分の気持に似てやしないかと思ふ。」という栄一の言は、後年の自伝的小説『根無し草』（実業之日本社 昭和18・6・25）の第一章「外を恐れる」で周知となっている回想と関連させて考えねば明らかにはなるまい。幼少期の白鳥は、先天的な虚弱質、癩性、矮小な体軀のため、外界との親和的關係を成立させることが出来なかった。『根無し草』第一章は、外界を威圧的なものと

して過敏に反応しなければならなかった体験について、平明な語り口によってこまごまと縷述している。外界への恐怖感、及び人間の関係性への違和感は、抜きがたいものとなり、その代償として、家郷を遠く隔たった異空間への夢想、脱出願望を育み、あるいは読書を介して観念の世界への心理的退行を結果することになったのである。第一章に見える家出事件、「八大伝」の耽読などは、その典型的な事例である。白鳥と律四の類似性を外界及び関係性への非親和的な違和感であると仮定すれば、「入江のひとり」の辰男が家人と言葉を交そうとしない沈黙、平素外界と接触を断つたような孤独な日常が追究されていることも納得しやすくなる。

ともかくも、大正四年、小説壇の泰斗として不動の地歩を占めていた白鳥は、父の言を通じて、家郷への違和感を共有しているにもかかわらず、その解放の手立てを奪われた律四に、その無惨な帰結の姿を発見したのではないか。最大限に享受した嫡男の自由と四男律四の処遇を逆転させれば、律四に言及した一連の作品が、「運の廻り合せ次第」（「今年の初夏」）「運次第」（「今年の秋」）「リー兄さん」などと、その命運が自分と無縁であったとは考えられないとくりかえし確認されるゆえんである。

因みに前記『正宗白鳥全集』第五巻の「解題<sup>註12</sup>」によれば、「『文章世界』一月号（注 大正四年）に載った『太陽』の広告では長篇『浮世を逃れて』が予告されている。」という指摘がある。この題名の作品は、上記全集第三十巻の作品年表にも見あたらない。大正四年の雑誌「太陽」に掲載された小説は、「入江のひとり」の他、九月に発表された「二少女」だけである。この幻の長篇の執筆を応諾したのは、広告の載った「文章世界」の発行年月日（大4・1・1）から考えて、前年のことで

あり、当然白鳥が帰郷する前である。それでは「浮世を逃れて」という長篇は、直接には律四に關係する創作ではあるまい。白鳥はなぜ「太陽」掲載予定の長篇執筆を変更したのか。推測すれば、大正三年末、「太陽」に発表を約した長篇小説の構想を持っていた白鳥は、翌四年の一月に帰省する。その時、妹乙未の上京問題と父の言が与えたインパクトが複合する中で、急遽、律四をめぐる家郷物語を追究する小説の起稿に変更することになったのではないか。二月に完結した連載小説「何処までも」（「中央公論」）が発表された外は、翌三月まで小説の掲載がないこと、及び前記「一念」「最初の女」が「入江のほとり」のモチーフの派生的作品であること等は、この二ヶ月の間、白鳥の創作の関心が家郷物語をめぐる終始していたことを意味し、上記の推測を補強しよう。

### 三

さて、ここで「入江のほとり」が「流出者と残留者」の関係をどのような構造として把握しているかを考えてみたい。小説の題名に直接関連する表現として「入江のほとり」の古めかしい大きな家」という一節が第十章にある。△入江のほとり▽という平面軸は、農民が「田地まで売って大阪や神戸」（四）へ流出し、他方漁業資源が枯渇しているため「次第に村同士で漁場の悶着が激し」（七）くなるような衰微の一途をたどる漁農村を舞台としている。その一面に十人余の家族が集う「古めかしい大きな家」が位置する。そして、その旧家の内部が、構成員の意識内容、志向するものの違いを描き分けるため、「二階」（一）と「階下」（同上）という垂直軸の対照構造をとっているのである。

冒頭第一章は、弟妹が「二階」で気ままな旅行計画、上京修学等につ

いて談笑する場面が始まる。念のためそこに集っている人間を特定すれば「三人の弟と二人の妹」とあるように、それは辰男・良吉・末の弟・勝代・末の妹であり、「階下」を生活空間とする老父母・才次夫婦は不在である。以後、「階下」の人間は第八章のぼや騒ぎの場面以外、「二階」の世界に直接姿をあらわすことはない。

それから「晚餐の報知」とともに、視点は「階下」へ移動し、「釣ランプを取り囲んで、老幼取りまぜて十人もの家族」の食事風景という家常茶飯の日常性に変わる。その後、視点は「二階」にもどった辰男一人に固定し、「英語の独学に耽るか、考へ事に沈んで、四年五年の月日を送つて来た」孤絶の姿にスポットライトをあてる。

「二階」と△入江のほとり▽の平面軸の關係は、上京を目前にした勝代が「この村には厭らしい人間ばかり居るから外へ出るのが恐しい」（五）と言う不適応感から考えることが出来る。つまり、勝代と良吉の間で「東京話を聞いたり訊かれたり」（二）する「二階」の世界は、野卑で未開な故郷を侮蔑し、近代と同義の東京に魅了吸引されてゆく出郷者及びその予備軍の空間なのだ。他方、「階下」の世界は、老父と才次の現実対応の姿勢に保守・進取の世代的対立様相を呈しながらも、結局そこに生活の現実的根拠を見いださねばならない残留者の場なのである。

「二階」と「階下」の人間が一堂に会し交錯する晚餐の場面は、「隣村まで来てゐる電燈が、いよ／＼月末にはこの村へも引かれることに極つたといふ噂」で持ち切っている。「釣ランプ」からようやく「電燈」へ切りかわろうとする情況は、小説の結末で「隣の者が近い中に乗合馬車をこの近所の国道へ通さうと企てゐる」（十）と危惧する人力車夫の言葉と対応する。近代化の波は、旧態依然とした村落共同体の停滞



情況へ徐々にではあるが確実に侵入し始めているのである。この近代化の指標である電燈導入の可否をめぐる家人のやりとりは、新しい情況に対する認識の相違を自ずとあぶり出すことになる。

「(略)電燈も村へ来りや丸で断る訳にや行くまいから、まあ義理に一つだけは付けることにしようが、畢竟無用の事ぢや。」と、老父は云つた。

「しかし、皆んな電燈にすると、手数が掛らんし、火事の危険も少なうなつてよう御座いますぜ。」と次男の才次はさう云つて、少くも二つは引かなきやなるまいと言ひ張つた。

旧来の「釣ランプ」の日常に自足している父の精神は、「義理」という大勢順応の事大主義的対処とパラレルな関係にある。常々「経済的」(四)が口癖であり、加えて守旧的な意識は田舎から闇を駆逐する根本的な情況変革の必要を感じないのである。即ち、父の言分は、現状の変更を厭う退嬰的な保守主義の精神を意味し、それは延いては窮乏する一村の情況を不可避にしている八入江のほとりVの共同体を支配する無為の精神を代弁するものと解してよいのである。それに対して、省力化と危険の回避という利便を主張する才次の合理的かつ進取の立場は、家産の現状維持に満足し、加速する村の衰微に無反応な父のために、「知恵と資本のある者」(七)を必要とする義侠的な救済事業が実現できない不満と焦燥に結びついてゆくことになる。

父に体现されている現状に埋没した無為の精神は、「階下」の世界に新旧の対立図を作り出すと同時に、前途有為の「二階」の若者の自恃を刺激し、侮蔑と反感を惹起させるのである。若者がつぎつぎと故郷拒絶者とならなければならない要因は、八入江のほとりVの平面軸に広がる野卑な現実、及びその共同体を支配している退嬰的な意識構造という二

面のメカニズムであったのである。そうすると、冒頭第一章の「古めかしい大きな家」の内部を「二階」と「階下」で対照する構造は、居住者の意識志向、その対立を空間の意味づけによって描き分けようとした意図的な導入部と解釈すべきであろう。その後、視点が家人の一人辰男に固定することによって、いずれの世界にも生の根拠を見いだすことが出来ない辰男の特異な位置が明快に浮かびでる仕組みをあわせ提示することになっている。

それでは、意識志向の違いに応じて、二つの空間に配置された旧家の構成員と辰男の関係は、どのように把握したらよいのであろうか。先走って言えば、「Dの事」に見える次のような一節は、白鳥が「入江のほとり」の作中人物の比重の置き方、及びその相互関係をどのように脳裏に描いていたかを説明するにあたり、恰好の補助線として活用できる。

私の心は一日二日Dのことにばかり集中した。幼少の頃から目に触れ耳に触れたことを一心に思ひ出して、零細なことを寄せ集めてDといふ人間を明らかに描きださうとした。この一人を描かうとすると、父母兄弟のすべてがそれを取りまいて鮮やかに浮んで来た。故郷の山や海や人家も今見てゐるやうに目に映つた。(中略)一家の運命や人間の流転の真相も、私は都会で見知るよりも、その小さな田舎で一端を窺つてゐたのだつた。

これは、辰男に作中唯一少年時代から現在にいたるまで、一代記風の叙述が施されていること、辰男を焦点にし、彼をめぐる放射状に配置された家人がそれぞれの恩感で介入してゆく作中人物関係の説明に代用できる。約言すれば、「入江のほとり」は作中人物の相関を通して辰男と旧家の流転の運命相を複合的に描いた小説なのだ。

一般論として、叙述の多寡は当然作中の主格的人物の判定材料にな

る。内面に関する叙述箇所を見ると、辰男は全体の半ば近くを占める。辰男の位置の重さを瞭然とさせる叙述量である。それに加えて、辰男についてだけ、内面の変遷史が、回想形式を使った少年時代から現在にいたるまで一代記風に叙述されているのである。この叙述上の特徴は、彼の内面が過去から大きく変貌しているため、その軌跡を年代を追って略述しなければ明らかにならない方法的要請による。辰男の内面の到達点は、端的なキー・ワード表現である「乾いた彼の心」(二)や、それに類似する「干乾びた切口上」(六)などから窺うことができる。辰男はなぜ瑞々しく潑刺とした感情を枯渇させ、乾いた心Vに陥らねばならなかったのか。

かつて、同じ学校で教鞭をとっていた関係で、辰男にとって比較的「打ち融けた話」(一)も出来、疎隔感の少なかったのが弟の良吉である。その良吉も既に高等学校の学生となり「隔りが増し」(一)ているわけだが、良吉が出立する前夜、辰男は窓外の夜景を眺めながら「物哀れな気持」(二)に沈みこむ。

夕月は既に落ちて、幾百もの松明が入江の一方に絵のやうに光つてゐる。耳を澄ますと小波の音が幽かに聞えたが、空も海も死んだやうに鎮まつてゐる。宮を囲んだ老松は陰気な影を映してゐる。彼れは他郷から帰省した者のやうに、今夜は少年時代の自分の姿を闇の中の彼方此方に見詰めた。……もつと快活で元気のよかつた昔の事が未生前の事件のやうに心に浮んだ。

良吉の離郷は、辰男に残留者の孤立的位置の現状にあらためて目を向けさせる媒体なのである。そして、昼間の明視の世界の日常性を包み隠して詩化する夜景は、辰男が他郷からの帰還者のように生き生きと内なる想念にのめり込む追想を自在にさせる。その結果、現在の「乾いた

心Vから隔絶した「少年時代」の時間へ回帰することができたのである。続いて、「快活で元気のよかつた昔」の牧歌の風景が、封じこめられた記憶の中からつぎつぎと蘇生してくるのである。

あの時分は川尻に蘆が生えてゐた。潟からは浅蜆や蜆や蛤がよく獲れて、奇麗な模様をした貝殻も多かつた。が、今は入江の魚が減つて、岩のあたりで釣魚をしたつて、雑魚一匹針にはかゝつて来ないらしい。山や海の景色もあの時分は今よりも余程美しかつたやうに思はれる。向ひの小島へ落ちる夕日は極楽の光のやうに空を染めてゐた。漁夫の身体付きからして昔は巖のやうだつたり枯木のやうだつたりして面白かつた。

「あの時分」「昔」と「今」の語をくりかえす行文は、辰男が過去と現在の間を往還し続けている内観の様子をよく説明する。過去と現在を透視する複眼によって、自然と人事が変容したことの確認は、辰男にあらためて充実した牧歌の少年時代が過去に置き去られた喪失の事実直面させるのだ。しかし、追憶の中に描き出された辰男の少年時代は、その延長上に現在の孤絶状態を必然的な帰結とするものではあるまい。なぜならば、かつて「音楽家」を志望した辰男は、勝代と同様出郷を夢見る「二階」の住人であつたからである。では、異様な孤絶に陥つた原因は、一応出郷者の願望が挫折させられたためであるが、その要因をそのための鬱屈する思いだけであると特定して考えるべきではあるまい。

辰男は、勝代がしばしば放言する家郷への軽侮の思いを一度も表だつて語ることはない。だが、辰男と外界の關係は「平生雨戸一枚隔てた外の景色とは馴染みが薄い」(二)のであり、裏山に登り眼下の景色を見下ろした時、「辰男は全で他郷を見渡してゐるやうで方角も取れなかつた」(六)。外との接点を失つたこの茫然たるあり様は、尋常な孤立者

ではないことを物語る。第八章の失火事件後、「村一面に焰の海となつて、見覚えのある村の者共が顔や手足を焼け焦がして泣き叫んでゐる光景を彼れ（注 辰男）は夢みた。」という表現から解釈を帰納すると、辰男のこの不穏な夢想には、勝代と同様な家郷への違和感が深く潜在していたことを証明する。それを出郷によって解消できなかったため、上記のような外界との非接触的日常を招来していると考えざるを得ない。因みに、前記の辰男の夢想は、「二家族」の主人公が第四章で、「芋虫のやうな生活」を強いられている村民に対して「いつそ激しい雨風で村全体の押し流され、醜い生物の亡ぼされたらばと思つた。」という条と全く同質のものと見てよい。この二人は外面上の距離はなほだしい。しかし、その資質は存外近似しているのだ。「二家族」の主人公の自持のトーンを弱め、出郷願望を挫けば、辰男は出郷かなわなかつた「二家族」の猛夫の後身とも見なせるのだ。

第六章の次の一節は、家郷に閉塞させられた辰男が、その鬱屈感を自作の文章に書きとめることによって、かろうじて生の実感をあかしだてている様をよく伝えている。

「風が吹けば浪が騒ぎ、汐が満ちれば瀉が隠れる。漁船は年々殖えて魚類は年々減りつゝあり。川から泥が流れ出て海は次第に浅くなる。幾百年の後にはこの小さい海は干乾びて、魚の棲家には草が生えるであらう。……」こんな自作の文章を、辞書を繰つては、一々英字で埋めて行つた。

この「眠つた海」と題された対句仕立ての文章は、第二章の追想によつて過去と現在の間を往復しながら、自然の景観が変容した確認を通じて、「少年時代」の喪失に向き合っている回想の条に対応する。緩漫な自然の営み、ゆるやかに流れる時間の堆積に埋もれ、徐々に潑刺とした

生のあり様を失つていった辰男の内面変化を髣髴とさせる文章である。

「小さい海」が元の姿を失つて「干乾び」る変貌は、そのまま辰男の内面が干乾いた心／＼に到達する道筋を暗示しているのだ。このような辰男にとつて、外界は自己の想念が投射されるカンバスに過ぎなかつた。例えば、裏山に登つた時、眼下の「墓地」や「鳥の群」が「皆英文の課題としてのみに触れ心に映つた。」（六）という条は、外界との関係を孤独な想念を仮託する素材視することによって安定していたことを示すものである。いわば、辰男は繭の中の蚕のように内なる想念に身を封じることによって「堅固な心」（八）を成り立たせていたのだ。ここに「この辰男の存在の、地元に住ながらの孤絶の深さは、地元への嫌厭のあまり外が恐くて出歩けない勝代の比ではない」理由が存するのである。<sup>註13</sup>

だが、辰男の英語独学へ実利的観点から執拗に介入し、それを不毛の情熱、徒勞と断じた栄一によって、さしもの辰男の「堅固な心」も亀裂が入つてゆく。失火事件は辰男の安定を崩壊させる仕上げだが、その時、繭を破られた辰男は、外界との真の關係について「先日のように目の前の眺めが英文の新たな材料として目に映らず、永の年月自分を押し籠めた牢屋の壁か何かのやうに佻しく見えた。」（九）と言う終極の認識に達するのである。この時の辰男は、失火事件という非常事に出会いはがら、「電燈」を「不経済」（八）と斥けた老父が象徴する、「釣ランプ」を囲む牢固とした保守主義が支配する「牢屋」のような家郷の中に永遠に幽閉されてゆく運命に達したのだ。

辰男を家人との關係から踏み込んで考えると、彼の孤絶の原因は、人間が關係性の網の目にくみこまれてゐる社会的存在であると言ふ意識が剝落しているためでもある。家人が一樣に口をそろえて功利的観点が

ら「正教員の資格」(六)をとるよう説得にあたるのに対して、傍若無人の無反応でいられるのは、この意識の脱落であると見るべきである。隣国作州の代用教員時代「世間で極めた名前を知らずに集めてばかり」(九)た植物採集の話も、名称によって物へのこだわりに興味ある社会性を付与しようとし点で、同様の奇行と言える。このような辰男の奇矯な独善については、「入江のほとり」以降、特に「変人」などの作品に深く追究が試みられることになるが、「変人」の「世上一般の規定が私には呑み込めない。」という一節を導入すれば、辰男の姿は、人間の関係を規定している社会通念的な価値規範が、仮構のもの、便宜としか考えられない準拠不能者の一面が早くも追究されようとしているとだけは言うことが出来るよう。

## 四

「入江のほとり」は、作者が擬せられている栄一が小説の中間第六章に入ってからしか登場しないこと、彼には小説の世界を一元的に統御する視点人物の役割を与えられていないことなどから、通常の私小説の概念を適用することは出来ない。白鳥は「入江のほとり」の世界を高めから俯瞰する位置にいるが、栄一は多元的視点の移動によって登場人物を客観視する方法原則から自由ではないのである。第九章で栄一は辰男に島や禿山の開墾をするよう勸農を説く。その「一廉のいゝ思ひ付き」(九)は、衰微するしかない土地の実状に無知な空論であると、弱輩の勝代によって一蹴される始末なのである。この条は、白鳥が栄一を相対化する視点で描いていることを明証する。

栄一は冒頭奈良からの通信に「何処へ行つても枯野で寂しい。」(二)と伝えて来るように、諸所をあてどなくさすらう虚無的な彷徨者であ

る。「二階」「階下」のいずれの世界にも帰属していない栄一の冷めた目は、辰男をめぐる人間相関図の奥行きを深くすることになっている。しかし、白鳥の虚無的心象を託された栄一は、辰男の孤絶の世界をついに認識することが出来ないのである。第六章で、栄一は前記の辰男の「自作の文章」の英作文を目にしている。だが、たとえその英文が意味不明のスペルの羅列であったという条件があるにしろ、それが内向する人間の切ない自己を確認する行為であるという理解にいたることはないのである。結局、栄一は辰男の内面を浮き彫りにするため放射状にとりまく副次的家人群の一人である位置を逸脱しない。

それでは、「入江のほとり」の世界を俯瞰している客観主義の視点とは、終始揺らいではいないと言えるのか。この問いは、「入江のほとり」と翌年の秀作「牛部屋の臭ひ」「死者生者」の客観小説との間に質的差異があるかどうかという問題でもある。第七章に、人生の彷徨者として「気儘な旅行」に執心する栄一と村の窮乏を救うための「事業」の計画を語る才次との対話の場面がある。「流出者と残留者」の枠組みから見れば、この対話は第四章の勝代と才次の対立にも重なる。そこでは「都会住ひをした者」に家産をめぐって、安易な精神的依存を批判する「質素な生活をしてる者」の側からの自立の要請が打ち出されていたのだ。いわば第四章の才次と勝代の対立は、松本鶴雄<sup>註14</sup>氏が指摘している通り、第七章の栄一の「代理戦争」なのだ。第四章で両者の明確な対立様相を描いておりながら、第七章の栄一の「何かと問はず語り」をする才次への応対は、彼が一切を虚妄視しているため話がかみ合わず、冷淡にあしらっていると言うよりも、やはり歯切れの悪い問題回避的な対応にしかならないのである。続けて松本氏はその原因を「作者自身の生家に寄せる踏ん切りの悪い、未解決な部分、曖昧模糊、優柔不断が結果

している」ためであるという鋭い解釈を提起している。確かに第七章に長兄白鳥と次男敦夫の隠微な葛藤が露呈しているにもかかわらず、客観小説の描写はその様相を冷徹に描くことが出来ていないと断ぜざるを得ないのである。

そうすると、大正五年、白鳥の散文小説がピークを迎えたことについて、白鳥自ら「『牛部屋の臭ひ』『死者生者』の頃になつて、やうやく、芸術らしい芸術が出来上るやうになつたと云つていゝ。」と自負した評価と、前年の「入江のほとり」はどのように関連させてゆくべきなのか。辰男を焦点にし、彼をとりまく家人を多元的視点を駆使して立体的に描こうとする試みは、前記『まぼろし』序で表明された散文の「新しい道」をさぐる挑戦であつたと言える。しかし、栄一は真に作者によつて客体化されきつておらず、問題を回避する叙述の醗化が露呈しているのを否めないのである。おそらくそのため、白鳥は「芸術らしい芸術」の中に「入江のほとり」を入れることを許容しなかつたのであろう。つまり、純然たる他者を描いた「牛部屋の臭ひ」や、序章に登場する作者の分身的人物を街頭を行き交う歩行者の点景人物にまで後退させ、小説を俯瞰する目を徹底させることが出来た「死者生者」に到つて、純乎たる客観小説が成就されたと見るべきである。その意味において、「入江のほとり」は秀れたもので、これをもつて『牛部屋の臭ひ』『死者生者』等の傑作を生んだ一頂点の前奏と見なすべきであらう。「という谷川徹三<sup>註16</sup>の評言は、簡潔ながら作品の間の質的差異を直観的にシャープに弁別し、位置づけた見解として首肯できるのである。

## 註

1 無名氏「四月の小説」(「時事新報」大4・4・16)

- 2 上司小剣「四月の創作白」(「読売新聞」大4・4・13)
- 3 吉田精一「自然主義の研究」下巻(東京堂出版 昭33・1・31) 782・785ぺ。
- 4 松本鶴雄「正宗白鳥・大正八年前後」(「群馬県立女子大学国文学研究」第5号 昭60・3)
- 5 「正宗白鳥全集」第30巻(福武書店 昭61・10・31) 560-561ぺ。
- 6 「よみうり抄」の記事は、「新聞集成大正編年史」(大正四年度版・上) (明治大正昭和新聞研究会 昭54・4・15) による。
- 7 「病中日記」(「新公論」大4・6)の五月九日の条に「妹も暫らく顔を見せないが、もう大分東京言葉を感じたらしい。」とあり、「春が来たのに」の叙述は、乙未の上京をそのまま踏まえたものであることを裏づける。
- 8 古井由吉「東京物語考」(岩波書店 昭59・3・28)の「楽しく独学」45ぺ。
- 9 小説「Dの事」の内容は、大正六年四月二十四日、同じく六月八日付の父浦二宛書簡に合致する。後者の書簡には律四の身のふり方について「これは小生数年前より考居り候ところにて候」と見える。この文面は、父の許しを得ず上京、修学を始めた律四に対して、経済的補助を父に決断させるための文飾ではあるまい。白鳥が小説「Dの事」が発表される「数年前」(恐らく大正四年の帰省時を指そう)から律四の行く末に苦慮し始めていたことを証する資料である。
- 10 高橋英夫「異郷に死す 正宗白鳥論」(福武書店 昭61・10・15) 128ぺ。
- 11 注10 149ぺ。
- 12 「正宗白鳥全集」第五巻「解題」(中島河太郎) (福武書店 昭58・12・25) 506ぺ。
- 13 注8 47ぺ。
- 14 注4
- 15 「『死者生者』解説」(光文社 昭22・9・15)
- 16 「入江のほとり」(「解説」) (岩波文庫 昭4・6・25) 因みに、坂本浩「白鳥氏の小説に関する私見」(季刊 明治文学 昭9・11)も、「入江のほとり」を大正五年の秀作を可能ならしめた「過渡的作品」として位置づけている。